

八年五月発行)の表紙に「端午」といふ題で掲載した短文の中、

今度外国に出掛ける日本人は何を忘れても大袍の底に鯉轍を収めて行く。そして向ふの「五月一日」の空高くあの大きな鯉の姿を泳がせたら、随分痛快だらふし向ふの人達の喝采を呼ぶ事であらう。暇が出来ると僕、こんな愚にもつかぬ事を考へる。

(長頸子)

を想ひ出して、更に、面白いなあ、と思ひました。そして尚、日本の外交官がク翁へ鯉轍を贈った事よりも、長頸子君が此の文章を発表した方が早いのだと思ふと、いよ／＼もって面白いなあ、と愉快でした。

「ねえ長頸子君、君の希望が実現して、而も、仏国政界の大立物クレマンソーの邸宅の大空に鯉轍が懸つて居るのは痛快ぢやないか」たまらなく面白くなって、斯う云ひかけたくなりました……が、苦笑して死んで了ひし梅雨かな。やつぱり、幻にも見えるものは、淋しい笑ひです。

「才人長頸子！」——それはもつとも派手に現はれてゐた故人の一端の輝きだと思ひます。其才は、年と共にグット奥の方に潜んで行くべきものだと思つてゐました。そして故人の本質は、令弟鳥塚子君が本誌に書かれた「思ひ出の兄」の中にある、「干菓子に、古い色の茶器からしたみ落とされた玉露に親しむ風であつた」と云ふ即、この「心境」だと以前から私独り窃に思つてゐました。

ですから、私一人は、長頸子君が「曲水」に発表された文章(九卷以前の)にも俳句にも、諸君のやうに、たやすくは感心しませんでした。それが、九巻に入つて発表された、「あの頃のこと」「浜

町雑記」「一碗の茶」に至つて、俄かに落ちつき、急に、澄み入つて来たのに驚きました。又、一、二回発表された数句に於ても同様の感に打たれました。文章の方は姑く措いて、其の俳句の、

わだつみの底に網這ふ梅雨かな

蓑虫のいとなみよ秋の深みたれ

すみ／＼と大空暮れぬ蓑虫よ

湯灌の燈そのま、にある蛙かな

友来たりて我像を描く

閑かにもぼけし日さしや桃の花

震災籠居

秋の日のあまりに明かし門の外

の如き、いづれも之を、其以前、才気から成り立つてゐる俳句と比較すると、驚く可き相違があります。

ちつと澄んで来た長頸子君、其持長の一端の才気でなく、本質の「寂び」に根ざして来た長頸子君の芸術は、かくて、自然観、人生観を根底とする文章が生まれ、やがて、愛を基礎とする宗教が現はれ、そして力強い内容が、あの練達された才筆によって透明に表現されて来るに違ひない。いよ／＼かねて私の期待してゐた長頸子君の芸術が確立するのだ。ほんたうに嬉しいなあ、と幾度か思つた事でした。

その長頸子君が、ボキリ!と倒れて了ひました。

何といふ悲しい事でせう。

英雄秀吉でも名優団十郎でも天分だけの大業を果たして死んだのです。が、長頸子君にあつては、大業を遂げるだけの天分を持ったま、夭折したのです。其愛惜の情に至つては、到底比較にはなりません。実に惜しいことをしました。

(曲水10—9)